

巻頭言

総合文化研究所長 山口裕之

翻訳研究のプロジェクトの一環で、このところ韓国や台湾に足を運ぶ機会をもつようになった。互いに異なる立場で不幸な歴史を共有しながらも、そしてまさにそのことが日本とアジアの漢字圏の国々の言語と翻訳、文化と学問制度の歴史を決定的に方向づけてきたということを話し合いながらも、私たちは穏やかにつながっているのだということを、そのとき感じていたように思う。政治指導者たちの排外主義的な言動によって、不吉な世界的転換の場に居合わせているのではないかという感覚にとらわれてしまつても、そして排外主義的な言葉と力はあらゆるところに強力に存在するということを思い知らされるとしても、他者を受け入れる穏やかな理解はゆつたりと響き続ける。

響きという言葉は、美しい日本語だ。昨年度の『総合文化研究』の特集テーマに引き続き、音楽が今号のテーマとしてとりわけ意図されていた。音楽における響きとは、いまそこで鳴っている特定の楽器や声あるいは音の集合体を感じとられる音色や艶であると同時に、音が次第に消えていくときの余韻でもある。それは豊かな意味の拡がりをもたらす。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。」響きを耳にしている者たちが、ここでは同じ空間と感覚を共有している。その感覚は、音が鳴り響きながら次第に消え去ってゆくことによって、ある一つのものへと緩やかに収束してゆく。

文化研究がそのような響きとなり、共有される感覚の場、響き合う理解の場となることを願いたい。